現代日本人の死生観の形成
――仏教の役割と提言――

熊　沢　一　衛

本論文は、現代の日本人の心のあり様（よう）と社会の諸現象との関係を把握したいという目的を持っている。そのために、まずは生き方の根本に関わる、生と死についての考え方を歴史的に振り返り、今日のその姿を捉えてみることにする。一方で、われわれの周りに起っている現象からその起ってくる根源にまで考察を深めてみる。この両方向の接点に注目していきたい。さらに、今ここで生きるという観点から日本の社会や精神の歴史で大きな役割を果たしてきた仏教の役割と提言に絞り、上記の接点においてなにか有効な役割を果たしているのかを客観的にまとめてみたい。(1)

以下、論旨を明確にするために、箇条書きのスタイルを取っていくことにする。

1）タイトルの説明

a.「現代とは」―　1945年以後から2008年までを考えるのが順当かとも思われる。しかしわれわれは、バブル崩壊（1990）以降からに限定して考察する。それは価値の転換と新しい状況がこの時期に生まれていると思えるからである。より正確には、少なくともそうした新しい価値の生まれるチャンスはあったと思える。「現代」をこのように20年たらずに狭くしぼって見ることで、かえって正確に問題を把握することができよう。

b.「死生観とは」―　本居宣長（1730–1801）の研究者、子安氏の次の定義がわれわれには最適と思われるので、これを本論では採用することにする。

「だれにも訪れる死とそして死後という究極的な暗部を予想しながら、あるいはそれに対応しながらたてる、なんらか現世におけるそれぞれの生を律するような観念体系。」（『日本における生と死の思想』（有斐閣、昭和52、p.225）

このような観念体系が宣長にはなかったと氏は述べている。たしかに、『鈴屋答問録』で「死は悲しむしかないものであり、儒や仏の説は面白おかしい作り事だ」という姿勢を宣長はとっている。彼は、『古事記』に登場する神々の行動に照らして自分のそれを定めるという一貫した姿勢を取っていた。死に対しては、悲しむことしか出来ない、安心（あんじん）はない。仕方ないとなる。あきらめることを良しとする態度がこの辺りから定着していくのである。(2) と同時に、近頃は異常なまでに健康ブームが浮いて流れる如くある。

一体われわれ現代の日本人には子安氏のいうような観念体系が存在するのかという鋭い問いがすぐに出てくる。また、これを現在の西洋、特にフランス人の死生観のあり方と比較するというのも有益かつ興味深いことである。しかし、この問題は、筆者は別に論じているのでここでは余り深入りしない。(3)

c.「形成とは」―　形成されているのか、またその途中なのか、それとも形成されるのか、形成されるべき問題なのか、を含めて考察する。今の段階ですぐにも答えられるのは、確固とした死生観は形成されてはいないこと、そして困難ではあるがどのような形を取るにしても、時代によってそれほどに激しくは「ぶれない」だけの、しっかりとした生と死についての信念

が個人的にも、社会的にも確立することは望ましいのではないだろうか。
　もとより戦前のような軍国主義で固まることは躊躇されるが、あまりにも、ばらばらなのもどうであろうか。ふらふらとしていることと、何ものにも執着しないでしかも身を律していくことの違いは大きい。

d.「仏教の役割と提言」―　仏教の伝来以来の、仏教と日本人との関わりについてはこの後で簡略ながらも順次述べる。特に、(3) の項目「**日本人の精神史**」を参考にしてほしい。そこでは、仏教が歴史的に日本の社会でどんな役割を果してきたかを、簡単に箇条書き風に振り返る予定である。

　その後、どんな役割を期待できるか、またすでに役割を果たしているのか、どんな提言を昨今しているのかを客観的に見ていこう。「生を明らめ死を明らむるは仏家一代の因縁なり、・・・」[(4)] と唱えられるように、仏教がわれわれのテーマ　―死生観の形成―　に大いに関わることだけは、ここで既に言い得るだろう。現代の無関心な信仰の状況　―いわゆる無信仰―　故に仏教側からの提言がどの程度、人びとの心に浸透しているのかが、究めるべき問題であろう。

2）バブル崩壊後（1990年以降）の主な出来事

　タイトルの説明が、一応済んで、この第2）項目「**主な出来事**」では、できる限り精神に関わる出来事に限ってとりあげたい。阪神・淡路大地震は6000人もの死者を出した大災害であったが、その間に、「人びとが共同で助け合う姿を評価する」見方もたしかに存在するが（高瀬広居氏『日本仏教の再生求めて』）、個人を救うことに救済をためらう政府の姿勢や孤独な被災者の孤独死（自殺）も後になって多々報じられているので、独断ではあるがこの事件の大きさは認めつつもここでは精神的な面からは扱わないことにする。

さて、以下、様々な事件を簡単に整理するために、まずは問題を国外と国内に分けて列挙していこう。

国外では、ソ連の崩壊とアメリカの一極支配、経済のグローバル化が顕著になってきたことがこの時期の特徴である。資源と金融の力によって人びとの生活はいままで以上に圧倒されることになった。資源の少ない我が国は、さらに一層、知的財産を活用して生きていかねばならなくなっている。戦後から一貫して、国民、特に優れた技術者達の懸命の努力によって生活は豊かになり、物質的には救われてきたが、今後も国際的な日本の地位を維持する事態に厳しさは消えることなく存在する。

国内では、バブル崩壊を機に、われわれは、経済的に自信を喪失し不良債権の処理に官民とも追われ通した。「失われた10年」という言葉を経済学者が使い出してそれが流行した。2008年にはこの経済問題は一応解決し改善されたかに見えたが、また米国からのさらにひどい金融危機を受け、新たに経済的な危機が打ち寄せていると言えよう。すなわち、内も外も、経済によって、生活の基本の部分で不安にさらされ、精神は圧倒され続けている。将来に向かっては時代の閉塞感が満ちている。生活を担うべき人びとの苦悩は、先ずはいかに生活していくかであり、その他のことに気を使う余裕もない状態である。「生活の質」を語っていた時代は既に過去となってしまった。

オウム真理教の事件（地下鉄サリン事件）が1995年に起こった。いくつかのカルト集団の林立も確認出来る。真の宗教と偽の宗教の差は何か、差はどこにあるのかを人びとに鋭く突きつけた。宗教一般に対する警戒感を人びとの心に生じさせたと思われる。精神的空白のなかに、悪がはびこっていったという印象を筆者はもっている。

「自殺者10年連続、3万人以上　自殺率20以上」という事実が次ぎにこよ

う。多くは、失業や倒産による生活苦が原因と言われている。しかし、専門家によれば、自殺率が20を超すと言うことは、その社会が病んでいる証拠である。自殺を思い詰めて実行してしまう人びとに救済の手が差しのべられないのは何故であろうか。政治と社会のシステムに関わる問題であろうが、今回のテーマ―である、「宗教心」にも大いに関わると思う。(5)

「老老介護」ということも取り上げられるべきであろう。老いて介護し合う双方の極度の疲労は大きな社会問題である。老夫が老婦を殺す、またその逆のケースが報じられる。これは政治の貧困が引き起こしている悲劇であり、今後減ることはなかろう。その背景として、男女とも、過去最高の長寿（男79歳、女85歳）を記録していること、他方では超少子高齢化社会が到来している事実も見逃せない。ちなみに、2005年の要介護の人は432万人に達している。

次に注目すべき出来事は「犯罪」である。犯罪件数の多さではなく、このところ無差別殺人が多いこと、また尊属殺人の多いことが痛ましいのである。具体例では、秋葉原で派遣社員で不満を溜めていた若者が何人もの無関係な人を刺し殺した事件が記憶に新しい。（2008年6）

雇用の形態が、バブル崩壊以降に、正規社員を減らして、出来る限り安く使える派遣社員制を採用するという変化が上記の事件の背後にはあるらしい。2004年からは、製造業にも派遣社員が大量に導入されていたことを、人びとは今さらのように気づきはじめた。右肩上がりで行くという見通しが狂ったのである。
子供（14歳から職無しの30歳まで）の親殺しも多発している。命の大切さへの教育が欠けていると指摘されると同時に、この年頃の若者のこころがわれわれのテーマに関わっている。

偽装事件の頻発も挙げられる。（ブランド名を偽って使う、賞味期限を変える、内容物や産地を偽る、等）儲けるためには、さらに自分が食って行くためには、人をだましてでも不正をする傾向が定着してしまった。言葉を変えると、モラルハザード（道徳観の破綻）とコミュニケーションが苦手な人（若者はインターネットに夢中になり友人と対話しない）が増加、と同時に何かに頼りたい気持はあるが誰も頼りにならないことが同居している時代ではないかと思われる。（犯罪者は人の気を引きたかったとよく述べている）。かってのような経済発展が日本にもう望めないなかでの生活不安が、こうした個人にのしかかっていることになる。

3）日本の精神史（生と死の観点から見る）

1990年から過去へと遡る精神文化史の方法を敢えて取ってみる。その直前の時代の価値観が激しく転換される歴史をより鮮明にするために敢えてこの異例な方法を取るのである。（歴史的に、古代から現代へと見るには、最後の列から逆に見返すと良いだけである）。この作業をして、あらためて受けた印象はこうである。つまり、日本史には価値観上での断続の多いこと、日本の精神史は価値の継承の少ない歴史であることである。（a-hとh-aの両方から見て、変化に連続性が少ない。）

西洋の歴史と比較すると、この差がよりはっきりとするだろう。例えば、西洋（フランス）では、ルネッサンスは、キリスト教の背後に隠れていた、古代ギリシャ・ローマの文化を甦えらせた。モンテーニュはキケロやプラトンと対話して自己を形成し、新しくフランス文化を創出した。さらに彼の一生での死生観の変遷は、年齢や経験に加え、過去の文化遺産（ストイシズムとエピキュリズム）との対話で出来上がっていると言えよう。もちろん、キリスト教の精神は一貫して底流している。

それでは、日本の生死に深く関係する歴史を以下で概観してみる。

a. 今日から1945年まで遡る―　家父長制廃止、核家族が出現。人を束縛するイデオロギー（国家主義）より、経済のみに支えを求めて来た戦後50年の価値観が成立したが、それに対しての戸惑いと否定が1990年ごろから生まれはじめる。

b. それ以前（明治維新から戦前）の価値観―　国家神道、廃仏毀釈、富国強兵によって江戸時代の価値をすっかり捨てさり、近代化路線を取ってきた。敗戦でそれらがまたしてもすべて崩壊する。国家神道のせいで、古来からの神道の精神も、本居宣長ともども雲散霧消する。

c. それ以前、（江戸時代の精神）―　菩提寺と檀家制で寺院を利用して、キリスト教を禁教として弾圧をする。仏教は葬式と行政官の仕事に専念させられる。僧侶の妻帯を奨励する。僧侶はこうして信仰よりも家族の問題により関心を持つようになった。儒教を政治原理に利用する。（初代尾張藩主、徳川義直は儒教に心酔、葬儀、墓（廟）を儒教式とした。家来の殉死。）江戸時代には神仏合体から神仏分離へ進んだ。仏教に対して自殺行為を政府が設定したようなものである。

d. 信長と秀吉の時代（安土・桃山時代）―　比叡山焼き討ち、一向一揆弾圧（1570）に見られるように、宗教と政治を分離、宗教を政治に介入させないことが激しい形で実行された。キリスト教の布教にも余地（世界の知識吸収）が少しの間生まれる。その間を利用してザビエル（1549）らがキリスト教を広める。当初は成功。デウスと天の誤解で暗礁。島原の乱のあと、幕府の弾圧が過酷になり、信者は隠れキリシタンの道をたどる。

e. それ以前（中世末期から武士の時代）―　浄土教の浸透、1052年。宇治

の平等院鳳凰堂の建立(藤原頼通)は、上からの浄土信仰の象徴である。優秀な若い7名の僧が比叡山を下りて民衆の中へと仏教を浸透させた。天台のむずかいしい教義をはなれ、仏教が民衆の心をとらえた稀な時代であった（鎌倉仏教)。
親鸞の浄土真宗の教え等が民衆のなかへ入り、民衆の生き方に多大な影響を与えた。2009年は「愚禿親鸞」の750回忌である。「極楽浄土」へいく信仰が定着する。蓮如による浄土真宗中興、(1415-1499)。彼は「御文」(1471）を書き、越前から布教を開始し一大勢力となる。その結果、政治の攻撃目標となったが、今日まで日本人の「あの世観」を形成する中核となった。お盆とお彼岸等が習俗になる。最大の宗派としての浄土真宗の基礎ができる。道元、栄西の禅宗も武士を中心に信者を獲得した。

f. それ以前（奈良･平安時代）― 仏教と神道との習合。当初の神だのみから仏だのみへ移行、仏の優位。仏教が本地であり、神道は垂迹とされた。(6)

g. それ以前(聖徳太子前後、574-622)、神道に外来の宗教として仏教(538)が伝来する。道教なども他の文物とともに中国から入る（天皇や道タオの名称等の語源)。崇仏論争起こる（552、蘇我氏と物部氏の対立)。太子は仏教に帰依し護国のために仏教を利用した。儒教も加わり、3派の優劣論争が出る。「三教指帰（さんごうしいき)」の空海（798）が論陣を張った。最澄は、比叡山で子弟の教育、指導をする。仏教の知恵による政治の時代(律令国家）が確立した。

h. それ以前（日本国の成立）
　素朴な神々、自然に神々を見る。(大木や滝)、死は「けがれ」と見なし、そして「みそぎ」をする。自然が崇められる自然宗教の時代である。地方の豪族たちの権力争いから大和に政権が成立するに到る。今日でも日本人の心の根底に生きる自然観や、死を忌み嫌い、お祓いをする精神は存続し

ているが、今日この頃では人びとは、生活に追われて、これが疎んぜられる。しかし、上記のgとhの時代に、日本人のいわば原型をつくる遺伝子が決定されたのではなかろうか。衣食足りれば、この原型は失われたようでいて、にわかに甦るのではなかろうか。

4）現代日本人の精神状況

以上の歴史を念頭に置いて、ここで1990年以降の精神状況を、あらためて捉えてみたい。これが、先きの 2）で触れた諸々の事件の背景になっていると、筆者は確信している。

童謡「夕焼け小焼け」のなかの歌詞「山のお寺の鐘がなる」や別の童謡の「村の鎮守の森の神様」への郷愁が普通の成人の日本人の心底にはある。その証左に、お盆の季節には必ず、テレビの番組に懐かしのメロディーとしてこれらの曲が流れるのが慣例である。一方で、宇宙時代、科学時代、情報化時代に生きる都会人（1億2706万人のうち東京、名古屋、関西の3大都市圏に50％集中）の群がある。そこで、前記のような郷愁にいつまでも浸っていては生きていけない生活があり、当然、都会での荒涼とした心象風景になりがちである。

次に、彷徨う心とストレスを受け続ける大衆の姿が目に浮かんでくる。個性化のための自由は保証されてきたが、実際には、個性はなかなか発揮出来ないし、自由に行動もできない時代にあって、生きる辛さが余計に身にしみる。その上に、生活苦が追い打ちをかける。

「乾いた心」と精神の支柱を失っていることが、上記 2）の諸々の事件の根底をなすのではなかろうかと言う意見は正しい。（藤本義一氏の言葉）

また一方では、「支えのないこと」は人間の常態だと述べる仏教の経典があることもヒントになる。(『維摩経』の「無住」をめぐる一節と、紀野一義氏の解説参照)[7] 否、むしろ人間を「無住」の存在とすることにこそ、仏教とのたしかな接点があるのではなかろうか。しかし、この接点から熱心な信仰心となって仏教の教えに向かって上昇していかないことが問題であると筆者は考える。以下に紹介する調査でその理由の一部が示されるだろう。

このような現象は他の宗教(欧米におけるキリスト教)についてもみとめられる傾向ではある。いわゆる、信仰ばなれ、教会ばなれである。しかし、おそらく、よく言われる日本人の「無宗教」がこの点により深く関わっていて、日本独特の問題をもっていると思える。そこで次に、この無宗教という現象にスポットを当ててみる。

5) 無宗教の態度

a.「無宗教」について。阿満利麿(あま・としまろ)著『日本人はなぜ無宗教なのか』(ちくま新書、1996)がこの問題の解明に取り組んだ真面目な研究である。その要旨を次に書いておこう。同氏によると、先ず、日本人には一神教を避けることが根底にあるようだ。

風俗習慣として、初詣、お盆やお彼岸は執り行う。地鎮祭は、キリスト教関係の施設でさえ実施するといわれる。日本人の信仰は「自然宗教」と考えられ、キリスト教やイスラムなどの「創唱宗教」、いわゆる一神教はイヤ!という態度をとる。先祖崇拝と固有の霊魂観をもっているので、この自然宗教を仏教的に仕立て上げたものが諸々の習俗となっていると同氏は分析している。

ここで、先きに触れた国民の宗教心に関する調査結果を紹介しておこ

う。読売新聞の「宗教に関する国民意識」（1994年7月3日）を参考にしてみる。なお、同紙は長く同様の調査を今日まで続けてきている。94年の調査報告は次のように始まる。
「世代問わず薄らぐ信仰心」というサブタイトルをまず掲げる。何らかの宗教を信じているは26パーセント、信じていない72パーセント、答えない2パーセントと続く。なお比較と参考のために、同じ時期のフランスでの調査結果も書いておく。:（1994年、フランスの世論調査．カトリック67％、プロテスタント2％、無宗教23％　etc.）[8]

b.「無宗教」についての私見

戦後の教育基本法―　教育の世俗化（学校で宗教は扱わない）が深く関係していると思う。信仰の自由とともにアメリカから入った民主主義が、本来は政治の方法であるにもかかわらずモラルとして偽装された働きをしてきていることも原因の一つであろう。道徳観の継承とそれの教育機会とがかくして失われることになった。初等教育で「道徳の時間」が開始されて久しいが、上記の諸事件が示すものは、何よりもそのような道徳の教育そのものが上手く機能していないことを示している。

家庭の崩壊とまでいわれる現象が家庭でのモラルの教育を難しくしている。まして、宗教の教育については、親も知らないことであり、教育などできもしない。社会全体が、人間の基本的なルールを取り戻すことに失敗しているのである。
キリスト教の禁教と弾圧、また近くは、戦争中、国家総動員法で仏教から民衆の宗教も監視の対象となったことの思い出がトラウマとして日本人の心に残り、一方ではかたぐるしい一神教は（キリスト教徒は1％）避けるし、宗教へのアレルギーもある。
信仰心はあるのに、体系的な教義が嫌いである日本人が存在する。そこ

で、誕生の際はお宮参り、教会で結婚式、最後は家の宗派の仏式葬儀となる。何となく、雑多な宗教行事で過ごすことに慣れてしまっている。国民の意識調査がはっきりとそれを示していることは、すでに注（8）で示した。

c.「無宗教」への批判

前記の精神状況への批判も当然出ている。そのいくつかを以下にアトランダムに列挙しておきたい。積極的に人生の苦難に対応する力が生まれにくい! 物事をあいまいなままやりすごす態度になってしまう、とは精神科医の平山正美氏の指摘である。（『死生学とは何か』の中の日本人の死生観とターミナル・ケアの展望、参照）。
熱しやすく、あきらめるのが早い国民性である、というのは、もう決まり文句になっている批判である。
「美しい国の私」（川端康成）と「あいまいな国の私」（大江健三郎）（2人のノーベル文学者の受賞講演）の対比も興味ある出来事である。この両者の立場を、古い言葉であるが「止揚」してなにか新しい、現世での生活を律する規範が出来上ってほしい、と筆者は考える。
西洋からみて、宗教がないとか、なんとなく無宗教である日本人は「気持ちが悪い」、とか「日本人は理解出来ない人種だ!」とかのマイナスの評価につながりやすい。

6）仏教側からの提言―　今日の「心の状態」（無宗教を宣言する集団心性）への対応

a）中村元先生の仕事は大きな影響を与えている。中国伝来の仏教解釈をやめて、原典に当たっての仏教の本格的理解からはじまり、仏教の僧や学者の育成、さらに市井の人びとへの教育サーヴィスなどの功績は世界的

に認められているといっていい。台北の華梵大学でも、同大学の東方学研究所のテキストとして、同氏の本が翻訳されて使われていた。「老いに怯え死に慄く日本社会へ仏教からの提言」を書いた保坂氏も、もちろん中村先生の愛弟子のひとりである。[9] 保坂氏の提言をまとめてみよう。

「世を挙げて高齢化社会」への対応に追われる。近代化という、唯物主義から脱却することが大切である。そして、「肉体は衰えても、知恵は衰えることはない」という老いの倫理を確立、すなわち、「持てる力を出し尽くし、完全燃焼して最期のときを迎える」ことを提唱する。最後には、中村元先生の生き方そのものを見習うように同氏は訴える。
中村先生は、原始の仏教を原型のままサンスクリット（梵語、完成された語の意味）やパーリ語に直接あたり紹介する活動を生涯されたことはすでにわれわれも述べた。
ニルバーナ（解脱）とその道について、保坂氏はさらに解説を続ける。そこにこそ、先生の最後の希望と信念があったろうからである。
「自我を抑制し、生死を超えるような生き方は難しい。釈尊の臨終に例を見て見習うこと」を中村先生は最期において推奨される。（『大涅槃経』―別名、ブッダ最後の旅――大パリニッパーナ経）
最期において、「汝ら修道僧たちは怠るたることなく、よく気をつけて、よく戒めを保て」
・・・・・・この教説と戒律とに勤め励むひとは生まれをくり返す輪廻を捨てて、苦しみを終滅するであろう」と。同書の第3章を紹介して、このような死に方を推奨して逝かれた先生を回想されている。

ここには、敢えて困難な問題があることをどうしても筆者は述べねばならない。つまり、日本人には、六道をぐるぐるとまわり続けて、永遠にそこから脱出出来ない故の苦しみという概念は取り入れられなかった、ということである。おそらくは、それは原点はインド的思念であろうがそのまま

では日本人の心に入らなかった。またどうして、優れた教えとしての原始仏教がインドにおいてヒンズー教に吸収されて、定着しなかったかも同時に考えねばならない重い問題である。

目下のところ筆者には良い回答が出せない。ただ、歴史的に見て、輪廻を嫌う傾向は、中国で否定され、それが日本に入ったのではなかろうか。（中国の曇鸞から親鸞へつながるともいわれる）親鸞の「二種回向」は彼の独創ではなく、すでに中国にあったものではなかろうか、と推察する。この大問題については注のなかでもう少し詳しく扱ってみたい[10]。

b）田代俊孝氏とビハーラ運動[11]

ビハーラはサンスクリットで「安らぎの場」や「僧院」を、さらに「安らぎ」そのものを意味する。高度化した医療を宗教の側面から支えようとする運動である。キリスト教系の「ホスピス」と比べると、まだ馴染みの少ない言葉である、といえる。

インターネット上では、龍谷大学の活動者養成の試みが、伝えられている。また、21世紀の僧侶の姿勢を示すともいわれる。そのなかの若い僧侶の言葉が率直でわれわれの注意をかえって引く。「胸を張って僧侶と言いたい」。[12]

この運動の盛り上がりを、アメリカでつぶさに見てきた田代氏は、デス・エデュケーシヨンのテキストとして、『観無量寿教』を扱うことを提唱している。そして、親鸞のあの世ばかりか、「今を生きる姿勢」を評価し推奨する。ここには、従来の臨終に重きを置き、臨終の來迎と死後の往生より現世での即往生を求める同氏の熱い親鸞への傾倒ぶりがうかがえる。葬式仏教と揶揄されつつも（筆者は、葬式の儀式ももちろん大切と考える）そこから一歩踏み出そうとする、若い僧や若い学者の姿勢や意欲が伝わる。

c）［神仏霊場会］の活動

これは最も新しい仏教界の動きである。2008年の9月8日に、150の神社とお寺とで会を組織して、巡礼者として神社仏閣を一緒にまわる。同代表の、イスラム学者で東大寺の僧でもあられる森本公誠氏によれば、神社とお寺が同じテーブルにつくのは画期的なことである。[13]あらたな神仏習合なのかどうか今はわからない。

d）作家、文化人の活動

瀬戸内寂聴、五木寛之、梅原猛、玄侑宗久氏らの著作や啓蒙活動を軽く触れるだけはしておこう。この人達の本はよく読まれている。国民に仏教に何かを求め、できれば救いや助言を求める気持ちが大いにあることの証左であろう。文芸評論家の柘植光彦氏の批評を私流にアレンジして紹介しておこう。文化人（僧も含まれる）の活動を教団仏教を超えた新しい仏教の姿を垣間見させるとした後、氏は具体的にこう記している。

「密教の流れを汲む天台宗の僧侶（瀬戸内）と臨済宗妙心寺派の僧侶（玄侑）の対談集『あの世　この世』を読むと、仏教の一宗派にこだわらない。あらゆる経典、儀式修法をあえて否定しない。キリスト教さえも容認してしまう。、、、、、『水の舳先』は、禅宗の僧侶の生活を描き、主人公は、日本にある無数の死生観を調整していくのが僧侶の仕事であると考える」[14]

e）一般の人びとの考え方

最後に庶民の考え、心情を拾っておこう。仏教は「衆生」（しゅじょう）こそを仏の救済の対象になるものとして大切とするはずであるから当然一瞥は欠かせない。鎌倉仏教も原点はそこにあったはずである。

僧侶の使う用語が既に一般向けでないと批判される。その急先鋒のひとりの永六輔氏の『大往生』（岩波新書、1994）は、ベストセラーとなった。同新書のイメージを変えるほどの出来事と筆者には映ったものである。

様々な人の「ひと言」を集めるだけのものであるが死がテーマになると関心が集まることを示している。いくつかの例を同書から取り上げることとする。

「死ぬってことは、あの世というか、親のところへ行くっていう感じだと思います」（p.92）

「別れる寂しさ、生きてきた虚しさ。それに耐えれば、おだやかに死ねます。」（p.67）

「死ぬということは、宇宙とひとつになるということ」（p.67）

『死ぬための生き方』（新潮文庫、1991）もわれわれの関心を持ったバブル崩壊後の時期に出た本である。その解説にいわく。「筆者のほとんどは無宗教であるが・・・・・・・真面目な性格が文脈のなかに、あるいは行間ににじんでおり人は生きたように死ぬという重い言葉が浮かんでくる」と。投稿者のなかで、作家で評論家の中野孝次氏（作家）のみが、大変厳しい。「死は日本文化の中心にいつもあった、」さらに「死が見えない社会とは、すなわち生が見えない社会である。今の日本くらい生の本当の姿の見えなくなった社会は、日本史上はじめてであろう」（p.231）という。

ガン闘病記なども多い。ベストセラーになり、生死についての示唆に富むものが多いが、残念ながら紙幅の関係からここでは省略する。

7）結び

バブル崩壊後の18年間で、死を語ることを人びとは厭わなくなる。死生学の講義（デーケン神父はその嚆矢）や出版もはじまり、大学の授業に

も、また初等の教育にもごく普通なこととなって登場してきている。しかしその道の人材はなお不足していると言わねばならない。さらに介護の仕事を、インドネシアやフィリッピンに頼る日本の現実は悲しい。

断片的観想というレベルの死生観は出ているが、一貫性と体系性がなかなか形成されないのは日本人の特質なのかも知れない。

本論のなかで述べた、神道と仏教の過去の歴史上での「自殺行為」の後遺症はあまりにも深く重いと筆者は感じている。卑近な例だが、僧侶が制服で病院に行く例を想像してみよう。

信仰の自由は保証されているが、教育での宗教教育のないことは国際的にみても、例外的ではないだろうか。ここにはむずかしい問題が横たわっていて簡単に結論は出せないにせよ、宗教と合理的精神（科学）の問題は避けてはならない。(15)

「人を殺すなかれ」の教育も必要である。西洋を含め、世界のさまざまな見方を尊重することはもちろん大切である。和を尊び、他を排斥しない仏教は今こそ十分世界の求めに応じる資格を持っている。よりどころを失っている人間に支えを提供して、この世での生活を律するものの創出に寄与してもらいたい。念仏の道によるにせよ、禅の道によるにせよ、宗派など超えて、また仏教と仏教界の革新によって、人びとの内面を律するものを創り出してもらいたいものだ。

1970年には、京都で宗教者の会議があり、そのときに世界宗教者会議（WCRP）が創設された。その活動は続けられ、イスラエル、パレスチナ問題にも取り組んでおられることを知らないのではない。ただ、信仰の自由と寛容の精神をもちつつ、宗教での狂信は避け、世界の宗教者の対話の場をもっと増やすべき時であろう。仏教の精神はこの活動に適しており、日本仏教の専門家の活躍が望まれる。　（2009年3月26日記す）

注

(1)　本稿は、2008年10月4日と6日に、台北の華梵大学で筆者のおこなった講義と講演の原稿をもとにしている。創設者が、暁雲法師という禅仏教の方であり、先方の希望も入れて、仏教を中心に据えて話した。6ヶ月が経って、加筆訂正して、より論旨を明確にして日本の専門家のご批判を頂くのも自分のためになろうと思いここに発表する。当日の通訳は、私のかっての名大時代の教え子、庄　兵氏がやってくれた。出藍の誉れである。

(2)　台北での発表の際に、仏教に、神道を混ぜた死生観定義ではないかという指摘をいただいた。神道の死生観の定義を引いたのでなく、子安氏の定義には一般性があると思い同感して引用したまでである。そして死後と言う究極の暗部を想定して、現世の生を律する、なにか確固としたものを、筆者は強く探し求めている。

(3)　西洋の例と比較については、熊沢一衛著、「現代のars moriendi－モーロワとモーラン」（名大論集、1999）等を参照。

(4)『修証義』（曹洞宗）（しゅしょうぎ）の、冒頭の名言である。曹洞宗教化のための標準書と考えられる。宗門の教義を示したテキストともいわれる。1890年（明治23年）に制定された。

(5)　自殺の件は、2008年も、ほぼ3万人を超すとの、暫定発表があったばかりである。（2009年3月）「自殺総合対策大綱」（2007年決定）によれば、今後、10年間で自殺率を20パーセント以上、減少させる目標を立てた。（中日新聞、3月6日）財政再建を掲げながら、国債を発行し続ける政府の方針にどこか似ている。筆者は、まず苦しむ人びとに支援を続けるNPOのひとたちを助けるのが国民の為の政治につながり、しかも有効な方法だと信じている。

(6)　神仏習合のこと。帝釈天などのもろもろの仏様は何を意味するのかについては、義江彰夫著『神仏習合』（岩波新書1996）参照。以下で、同書を参考にして私流にこの重要な項目を要約する。

出発点としては、伊勢の多度大神の告白:仏教へ帰依したい（経済的負担）。

（763）―　神宮寺確立。律令国家の危機（王権と地方豪族の対立）。本地垂迹説は、「仏自体が積極的に神の世界に侵入して仏の化身と自らを位置づけるものである。」（P.169）天照大神の本地が大日如来となる。
日本史は神と仏の間柄がどうであったかの観点で見ることと書くことが出来る。黒塚信一郎著『日本人の宗教―「神と仏」を読む』（かんき出版、2005）はこのような観点から書かれている。その要点はこうである。
神々の誕生―神と仏の出会い―神々の願いを入れた仏―神は仏の生まれ変わり―神仏合体から分離へ―儒教を社会道徳に据える、仏は行政の役所へ―天皇を神として、神も仏も死んでしまった。

なお帝釈天は映画「フーテンの寅さん」で有名。バラモン教の最大の神、インドラが仏教に入り、梵天とともに仏教を守護する護法神となった。
地蔵さんも身近な存在。もとはバラモンの神、釈迦のあと弥勒菩薩の出現までのあいだの無仏の状態を補う。中国をへて日本へ入り、平安から鎌倉時代に地蔵信仰がひろがる。その他、恵比寿さん、大黒さん等もほぼ同様の経緯を辿り民衆に親しまれるようになった。

（7）　維摩経のことと「無住」について。

紀野一義著『いのちの風光』の第7章「病むもまたよし」（ちくま文庫、1997、P. 252）には、維摩居士と文殊菩薩の興味深い対話が紹介されている。維摩の病気の見舞いに行けという釈迦の勧めを皆のものが、かって痛い目にあった経験から辞退して、とうとう文殊菩薩が赴いて行くことになった時の対話である。他の人もぞろぞろ後をついて行くのが面白い。在家の目覚めたひとが、文殊を諭すのも、大胆な発想である。

「生けるものたちを救うには何を除いてやったらいいのか」
「煩悩をとり除いてやったらよい」
　　さらに文殊から次々と質問が放たれていく。（途中省略）

「顚倒想（判断がひっくりかえっていること）は何が本になっているのか」
「無住（どこにもよりどころがないこと）が本である。」
「無住は何が本になっているのか」

「文殊よ、無住に本などあろうか。無住に基づいてあらゆる存在が成り立っているのだ」
この「無住」の概念が、紀野氏は大乗仏教の根本といわれるのであるが、この「無住」には少なくとも2つの解釈があってややこしい。

長尾雅人氏の訳（世界の名著　2、p.147）は、「無住」をまず羅汁と玄奘の漢訳と紹介している。その上で、長尾氏本人はこの漢訳を排し、原語のaparatistha を「無基底」と訳している。どこにもとどまり住することがない。そのよるべき基底のないことは、根本のないことである。紀野氏とほぼ同様の解釈ではないだろうか。
　もう一つ「一定のあり方にとどまったり執着しないこと」という解釈もある。（『大辞林』）この箇所の「無住」について、中村元、鎌田茂雄両氏はこの解釈をとっている。『佛教語大辞典』も、当然ながらいくつかの解釈を載せている。
よりどころがない、と　支えがなくとも自分を律して、ぶれないこととでは、素人考えではあるが格段の差がある。又、両者は裏と表の関係にあるのかも知れない。このような「無住」の意味の進展、結びつき方については、筆者には不明なことが多い。教えを乞いたい。
ただ、先きの『大辞典』は維摩経第七観衆生品（かんじゆじょうほん）のこの箇所は、よりどころ無し、と解釈している。
なお、大森そう玄著『維摩経入門』は禅の道からの解釈に徹している。すなわち、無住は、一定の見方にこだわり続けない、ことの意味に解釈している。
　尾張の地に無住法師がきて山田重忠の建てた天台宗の長母寺（現在の名古屋市東区矢田）を臨済宗の寺としたのは、1262年である。この国師はこの地に44年留まり、『沙石集』などを書いた。この仏教説話集には、『序文』に次のように書いてある。「それ道に入る方便、一つにあらず」（そもそも、仏道に入る方法はひとつではない。）以下、現代語の訳で引用することにする。
　　「悟りを開く因縁も様々である。仏の大いなる心を知れば、もろもろの教義は同じである、、、、、」（集英社刊、P.20）。一定の見方にこだわるな、この僧の名前もそこで、無住となったのかも知れない。その4巻のⅠの話「無言上人の事」は、落語にも使えそうだ。他の宗派を謗っているひとが、我が宗派だけはそういうことはしない、それでどの宗派よりも優れているという落ちがついている。

(8)　資料が古いのではないかとの指摘を、当日、聴講者のひとりから受けた。

2008年5月29日の読売新聞の調査報告によると、何も（信じない）が依然として72パーセントを記録している。さらに、「多くの日本人は特定の宗派からは距離を置くものの、人知を超えたものに対する敬虔さを大切にする傾向が強い」と注釈をつけている。つまり、余り変化していないことになる。

一方、フランスでは、Ifopの調査で、2004年では、神への信仰は55パーセント、一方信じないが44パーセントとなっている。こちらはどんどん減少している。ほぼ、当日推定した通りであった。

(9)　中村元著『老いと死を語る』の解説、（pp.96-109）（麗澤大学出版2000年）参照。

博士の最晩年の講演を、テープから起こして、愛弟子の保坂氏が解説を加えているもの。

(10) 輪廻と親鸞の『教行信証』のこと。及び梅原猛『日本人の「あの世」観』をめぐって。

インドの哲学である、ウパニシヤッドの思想では、輪廻（人間は、死後にあの世に赴いた後、この世に生まれ変わってくる）の考えがある。無限にこの運動を繰り返す。人生は苦であるから無限にそれが続くのは耐えられないこととなる。（渡辺照宏著『仏教』、岩波新書p.66）
これを受けて、釈迦は輪廻からの解脱の道を苦難の末に見つけて教えた。これははげしい修行を経て会得したものである。普通の人にはとても真似が出来ない。この教えは中国に伝わり、日本に入ってきたが、六道の考えにはこだわりつつも、地獄の恐ろしさにより重点が置かれた。一方、そこに浄土教の考えが加わり、法然の念仏の教えをへて、親鸞が完成したのが、2種の回向である。（『教行信証』の教巻の冒頭）

浄土真宗のお経『正信念仏偈』にはこうある。「往還回向由他力」（おうげんえこう、ゆうたりき）つまり、われわれが浄土に往生するのも、この世に戻って衆生を救う働きをするのもすべて、阿弥陀如来の本願力―他力による。いわゆる他力本願の教えとなって日本では定着している。これに反して、自力本願の道は、禅の道で考えられることになり今日につながっている。

いずれにしても、輪廻の輪から脱出することは、それほどには日本では問題に

なっていない。問題は、前世と来生に深い関心が行き、かってな因縁の概念が拡大され民衆の間に横行して行った点である。(『大法輪』2009年4月号)
「迎え火」や「送り火」の習俗から見える『あの世』も、祖先崇拝と一体化した日本では、天文学的数字でいうほどの遠いところにあるのではない。あの世は、はっきりとはしないが、一般の人の意識では、せいぜい山の向こうぐらいにあるではなかろうか。山折、梅原両氏もほぼ同じ考えである。

(11) 田代俊孝『仏教とビハーラ運動』(法蔵館、1999) 参照。

本書は、「田代氏の著作「親鸞の生と死―　デス・エデュケーションの立場から」の続編である。『感無量寿経』を死を超えるテキストとして読むのが主旨である。韋提希夫人が絶望的な悩みから世尊の助けをえて、「無生忍」を得るところを踏まえ、曇鸞にならい「長生不死の法」を学ぶことが大切とする。(第3章　仏教と「死の受容」参照。)
無生忍は、無生法忍(むしょうぼうにん)と同じだが、苦悩と憂いのない世界へ至る道は険しく、われわれ凡人にはすでに会得は相当にむずかしいものである。そこで、ただ一心に念仏を勧めることが最終的には日本の民衆に入っていったのであろう。
「生を明らめ死をあきらむるは仏家一大事の因縁なり・・・・・・・・」この曹洞宗の『修証義』で述べられる、生と死も観照して超えるという考えも、同じくその会得はきわめて困難で、修行の厳しさが背後に想定されていよう。

なお、田代氏は最近、改訂版を出された。参考に出来なかったのが残念。

一般の日本人は、念仏「南無阿弥陀仏」を実践、お題目「南無妙法蓮華経」を唱えることを自然に行っている。戦争中は、仏教の活動を抑えるため、国はこの念仏とお題目とを同じだと教える指導をした、といわれる。

(12) 龍谷大学の活動は次のサイト。
http:// www2.hongwanji.or、jp/social/vihala/html/syouten__012.html
長野教区ビハーラ活動については、最後のみ、004.htmlで見られる。

(13) イスラム学者で、東大寺長老の森本公誠さんのインタビューを参照。同氏が

この新しい運動の中心である。（朝日新聞、2008年9月8日）さらに、『神と仏の道を歩く』（神仏霊場会・編、2008年9月刊）には、150の古社名刹が紹介され、「善知識」を求める旅が推奨されている。

（14）『国文学―　解釈と鑑賞』、（2009年2月号、至文堂）の「現代作家と仏教」参照

（15）青木新間著『納棺夫日記』（文春文庫、初刊1996）P.124−P.133参照
　アインシュタインの意味の深いことばがここには引用されている。
「科学的でない宗教は盲目である。宗教のない科学は危険である。」